

# 人間コミュニケーションの「パターン」に関する臨床心理学的研究

著者	花田 里欧子
号	12
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第95 号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59125">http://hdl.handle.net/10097/59125</a>

はな      だ      りょうこ  
花      田      里欧子

学位の種類	博士（教育学）			
学位記番号	教博 第 95 号			
学位授与年月日	平成 19 年 5 月 16 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当			
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 総合教育科学専攻			
学位論文題目	人間コミュニケーションの「パターン」に関する臨床心理学的研究			
論文審査委員	(主査) 教 授 長谷川 啓 三 教 授 菊 池 武 剋 准教授 加 藤 道 代 准教授 安 保 英 勇			

## ＜論文内容の要旨＞

本論文は、家族療法と呼ばれる、家族の臨床心理学的支援の領域で、一般的に用いられる、家族内の病理的なコミュニケーションの「パターン」や反対に健康な「パターン」などと呼ばれるものの内容について、大きくは、ベイトソンに始まるコミュニケーションに関する諸理論の検討と、それを基にした実証的な検討の二つで明らかにしようとしたものである。

実証的な検討は、従来、短期／家族療法の文脈で提出されてきているコミュニケーション・パターンに関する臨床的知見よりまとめられた、「間柄」「話題」「人数」「介入の検討」「介入の効果」の5側面について行われている。

そこでは、ベイトソンらが提案した「リダンダンシー」概念が、「パターン」と呼ばれるもの記述に適切ならば、臨床場面でいわれるコミュニケーション・パターンの〔硬直性－柔軟性〕とは、情報理論でいう  $R = (H_{\max} - H) / H_{\max}$  から算出されるリダンダンシーの値の〔高一低〕によって、一部は、記述されるはずであると仮定された。

本論文第 1 部は上記の仮説の背景、そして検討の対象となるコミュニケーション・パターンに関する知見についての検討を目的としている。第 1 部第 1 章では、短期／家族療法の背景および

その成立と展開までを記述し、第1部第2章では、その基盤となるコミュニケーション理論において、コミュニケーション・パターンを説明する概念として理論の中核をなす関係・コミュニケーション・リダンダンシーについてそれぞれ詳述している。第1部第3章では、これら概念的理解に基づいて行われてきた、短期／家族療法におけるコミュニケーション研究を、第1部第4章では、短期／家族療法におけるコミュニケーション・パターン研究を概観した上で、第1部第5章では、従来検討されてこなかった、コミュニケーション・パターンの記述にあたっての会話分析的知見の導入可能性を論じている。そこから著者は、臨床場面で無定義に多用される種々の人間関係の「パターン」とは、ベイトソンらが示唆したように、情報理論でいうリダンダンシー概念をヒントとして理解できるのではないかとし、そのような考えを人間コミュニケーションに関する「リダンダンシーモデル」と呼んで第2部以降の実証的な検討を遂行する。

【研究Ⅰ】では、従来の「間柄」にまつわる知見として「個人とその人の生活での重要な他者との間」におけるコミュニケーション・パターンは、そうでない「間柄」におけるコミュニケーション・パターンと区別されているということから、〔初対面ペア〕と〔友達ペア〕におけるリダンダンシーは有意差をもって示されるであろう、とされた。その結果、仮説は支持され、〔初対面ペア〕は〔友達ペア〕に比べてコミュニケーション・パターンがより硬直しておりリダンダンシー値が高いことが示された。【研究Ⅱ】では、従来の「話題」にまつわる知見として「個人とその人の生活での重要な他者」が問題的な話題を行う際のコミュニケーション・パターンは、そうでない「話題」に比べてより硬直化することを示唆してきていることから、〔旅行意思決定課題〕よりも、〔問題意思決定課題〕におけるリダンダンシーは大きく示されるであろう、とされた。その結果、仮説は支持され、〔問題意思決定課題〕は〔旅行意思決定課題〕に比べてコミュニケーション・パターンがより硬直していることが、リダンダンシー値により記述できることが示された。同様に【研究Ⅴ】までに「人数」、「介入の検討」、「介入の効果」について検討している。「介入の検討」では、独立（説明）変数を、コミュニケーションの基本的流れを規定する行動であるマネジメント的コミュニケーションとして特定されている「視線の方向付け」「反応を求める頭の動き」「反応を示すうなずき」「インタラクティブジェスチャー」の4つを設定し、分析の結果、「視線の方向付け」とリダンダンシーとの間に規定関係を見出している。「介入の効果」については、上で示された「視線の方向付け」によるコミュニケーション・パターンへの介入を操作して、〔介入前問題意思決定課題〕よりも、〔介入後問題意思決定課題〕におけるリダンダンシーは小さく示されるであろう、とされた。その結果、仮説は支持され、〔介入前問題意思決定課題〕よりも〔介入後問題意思決定課題〕はコミュニケーション・パターンがより柔軟になっていることが、リダンダンシーの値により示された。

第3部は、第2部における本論の一連の研究の考察として、従来の臨床的知見から導かれた各

仮説の検証から、『リダンダンシーモデル』が人間コミュニケーションにおけるパターンの可視化および記述を行いうること、また、その意義と展開について一般的に論じている。

本論文はいづれも審査体制を持つ学術雑誌と学術集会で掲載・投稿されたものを基礎に書かれたものである。

## ＜論文審査の結果の要旨＞

論文要旨でも述べたように、本論文は、家族療法と呼ばれる、家族の臨床心理学的支援の領域で、多用される割には無定義に用いられてきた、たとえば「病理的な家族成員の交流パターン」や反対に「健康なパターン」、また援助する側がことばにする「パターンが見えない」「見える」等といったものの、その内容について文献的に検討し、次に、それを基にした実証的な実験を検討することの二つで明らかにしようとしたものである。

本論文で示されていることは、実験から得られた具体的な成果を超えて大きなものがある。それは家族療法の勃興期に提唱された、心理療法を、他の特に理科系分野で主張されたシステム理論や情報理論のパラダイムに心理療法また大きくは臨床心理学一般を乗せようとした、その原点での主張を検討するものになっている。著者が指摘するように「家族内の病理的なパターン」や反対に「健康な家族のコミュニケーションパターン」、「まだそれほどパターン化していない、柔軟である」等という言葉は、家族支援やまた個人療法の領域でも、普通に用いられるが、それらは実は、ベイトソンに始まる、まだ形成期にあったコミュニケーション理論や情報理論の中から特別の意味合いをもって提案されてきたものであることである。

本論文はそのことをまず文献的な検討から明確にし、さらにそれを基にして実験を計画してその妥当性を検討している。

実証的な検討は、臨床場面でいわれるコミュニケーション・パターンの「硬直性－柔軟性」について、情報理論でいうリダンダンシーの値の「高－低」によって記述されるはずであると仮定し検討を行っている。

さて本論文は審査体制をもつ学術雑誌に投稿、採用された複数の論文を中心に、その後の研究も加えて発展させたものであるが、ひとつの論文としては、やや未完成な部分を感じさせるところもある。たとえば著者が本論文で扱っているものは、「パターンの硬直性－柔軟性」を主とするが、これで従来の「関係」や「パターン」に関連するものの中心的なところへ達しているかどうか、適当な属性、もしくは適当な変数を扱っているかどうか疑問を生起させるものもないことはない。

しかし家族療法という心理的援助の領域で、比較的最近の方法について、その原点ともいえるコミュニケーション理論や情報理論、それらは臨床心理学固有というよりはむしろ他分野で主張されてきた概念について、その理解は容易ではなかったものと想像できるが、との密接な関係を再度、実証的な方法で明らかにしたことは評価できる。

また終始見られる基礎研究と臨床的な実際をつなごうとする姿勢など、現在のこの分野の研究水準にかなうのは勿論、牽引的なものを感じさせる。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として合格と認める。